



## 医王山西方寺と田中則政

医王山西方寺と初代筑後国主田中吉政

田中吉政の次男、久留米城主田中主膳正吉信の菩提寺が、医王山西方寺だと言うことを知る人は少ない。そもそも、田中吉政と言う武将が、関ヶ原の功により筑後三十二万石の太守となったこともあまり知られていない。

筑後国は、現在で言えば福岡県南部全てを含んでいる。久留米は勿論、八女、大木町、みやま、柳川、大牟田、筑豊、朝倉、浮羽などの地域である。慶長6年(1602)から凡そ20年間の短い治世だった。

その間に、田中道と呼ばれる柳川久留米間の新街道や、各地域を結ぶ街道を建設し、用水、築城、更に26キロに及ぶ有明海岸線の堤防工事。筑後川、矢部川の掘削、灌漑、補強工事。城下町の形成などを行っている。飢饉の折は、普通なら玄米か二分搗きの白米の年貢米を、粳付きのまま五公五民の年貢で納めさせている。粳付きの米は、玄米にすると三割以上減ってしまう。救済としての年貢実質減免だった。

実現しなかったが、筑後川と巨瀬川が合流する地点から始まり、高野山の麓を抜けて柳川に至る、大運河構想が着工直前だった。この運河が完成していれば、筑後全域は大きく変わっていたことが窺える。

流通は勿論、用水、生活水、特産品、米の集積地が運河沿いに生まれ、全ての河川を結ぶ、一大流通ネットワークが誕生していた筈である。

田中吉政の次男吉信則政は、久留米城主として、これらの業績の右腕として久留米地域を支えて来た重要な人物である。江戸中期に読み物として書かれた、大田牛一の田中興廢記では、残念ながら粗暴な男として描かれている。56人の人を斬ったとある。逆にそこに疑問が生まれるのは、当然なこととしなければならない。

大大名の子息が、それだけのことをすれば、即刻幕府によってお家断絶である。君主の切腹だけで済む問題ではない。この疑問を出発点に、資料を調べた結果が、今回の芝居の完成となった。誰がこんな非道な男の為に、家臣が出家し、久留米の大庄屋であり古い名家秋山家が、菩提寺を建立しようとするだろうか。

この芝居は、医王山西方寺建立の経緯を伝えると同時に、久留米城主、田中主膳正吉信橋朝臣則政の人となりを知って戴く為のものなのだ。

26歳の若さでこの世を去った若き武将、田中主膳正吉信橋朝臣則政の物語。彼は、父吉政や兄弟家臣と共に、この筑後国を拓き、支えた青年でした。則政の物語、どうぞお愉しみ下さい。